

2019年度 ソニー幼児教育支援プログラム  
「科学する心を育てる」

## “ためしてみよう”を育むために



姫路市立中寺幼稚園

# 目 次

|   |                             |    |
|---|-----------------------------|----|
| 1 | はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・        | 1  |
| 2 | 「科学する心」の考え方と取組のテーマ・・・・・・・・  | 1  |
| 3 | 実践報告                        |    |
|   | いのちのつながり（5歳児）・・・・・・・・       | 2  |
|   | Myカブトムシ・プロジェクト（5歳児）・・・・・・・・ | 10 |
|   | ミニトマトっておもしろい！（4歳児）・・・・・・・・  | 13 |
|   | 園から家庭へ、そして園へ（保護者）・・・・・・・・   | 18 |
| 4 | まとめ・・・・・・・・                 | 20 |
| 5 | 課題と今後の方向性・・・・・・・・           | 20 |





## 1 はじめに

本園が「科学する心を育む」取組を始めて3年目を迎えた。小学校での仮園舎生活も最後の年となり、今までの成果と課題を明確化してみた。生き物や自然物との関わりが深まり、子どもたちの中には着実に生き物や自然の変化に気付く力が身に付き、疑問に思ったことを調べたいという意欲が高まってきている。その欲求に応じられる環境づくりや教師の資質向上に努めてきたが、果たしてそれが適切であるか、教師の自己満足で終わっていないかが課題として見えてきた。

そこで、今年は子どもの気付きを教師がどう受け止め、それをいかに展開して子どもの成長や発達につなげていくかを研究していきたいと話合った。その為には教師が常に見通しをもち、子どもの姿を読み解く力を育むことが大切だと考え、他園との交流や外部講師の活用、また園内研修の充実を図っていった。

## 2 「科学する心」の考え方と取組のテーマ

情報があふれるこの時代の中で、子ども達はともすれば知識だけは増えるが、体感できることは少なくなっているように思う。また、知り得た情報を疑いもなく信じ、間違った知識のまま覚えてしまうことが懸念される。

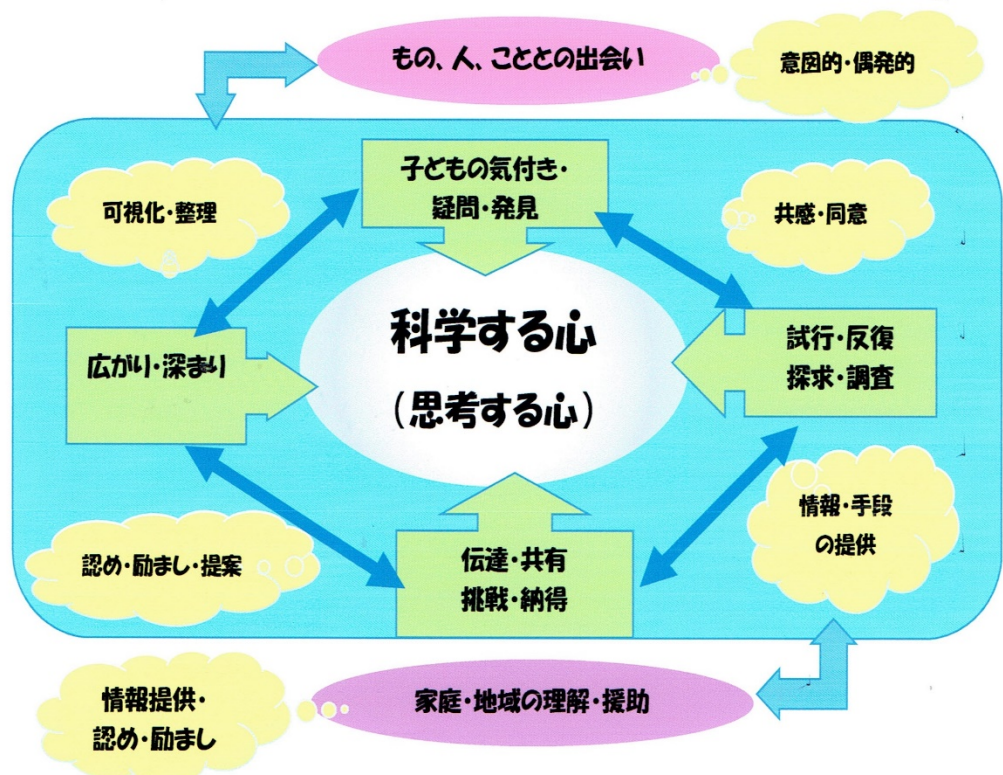
そこで今年は子ども達の中に育ちつつある「気付き」や「疑問」の力を発展させ、それを「経験」や「体験」として身に付けさせていくには、子どもの中に今何が育っているのかを把握し、それに適した教師の援助や環境構成が必要であると考えた。そして子どもたちが「どうなるんだろう」「ためしてみたい」という気持ちを育むことで情報が体感に変わるのではと思う。

手立てとして子どものエピソード記録を収集し、教師間で共有し分析することで様々な視点から子どもの育ちや思いを読み解き、教師力の向上を目指した。分析の方法として科学する心が育つときに芽生える子どもの心の動きを整理し、どういった援助や環境構成を教師が行ったかを可視化していった。

また園の取組を情報発信することで家庭の理解と協力が得られ、相乗効果が生まれるのではと考え視覚的に展示や掲示を工夫していった。

科学する心を育てる取組の  
捉え方の変化

＜科学する心を育てる相乗作用＞



### 3 実践報告

5歳児

## いのちのつながり

### 《カナヘビ探検隊～捕獲編》

事例1 「あれはなんだ？」 4月中旬

子どもの心の動き

教師の援助

小学校の校庭で遊んでいる時に①A児が素早く動く生き物を発見した。「先生、ヘビおった！」と言われ、みんなで急いで見に行くが、ヘビにしては短く、長いしっぽが生えていた。そしてすぐにフェンスの外に逃げて行ってしまった。②「これ、イモリちゃう？」とB児が言う。「じゃあ、なんの生き物やったか図鑑で調べてみたら？」と教師が言う、③いろんな図鑑を広げて調べ始めた。しばらくするとA児が「さっきのカナヘビや！」と図鑑で見付け、喜んでた。「どうしてカナヘビやって分かったの？」と教師が尋ねると、④「だって、さっきのやつと色とか模様とか一緒やで」「そうそう。しっぽの長さも同じやもんな」と一緒に調べていた子ども達も納得し、子ども達の頭の中の辞書に「カナヘビ」という名前が加わった。



【考 察】

① 発見 ② 気付き・疑問 ③ 探求・調査 ④ 納得・伝達・共有

今までカナヘビにはあまり興味を示さない子どもが多かったが、見たことがない生き物と出会い、しっぽの長さや素早い動きなどその形や動きに心を動かされ、一気に興味が広がっていったのだと思う。最初カナヘビを見たのは一瞬だったが、子ども達はカナヘビの色や模様、しっぽの長さなどの大きさを記憶しており、子ども達の観察力に驚かされた。また何か知りたいことがあるとすぐに教師に聞きに来る子どもが多かったので、虫眼鏡や図鑑など自分達で調べる方法を提示して自分で調べられる環境を用意し、調べて分かる喜びへとつなげていければと考えた。

事例2 「ワナ仕掛けたらええやん」

数日後、子ども達がカナヘビを捕まえようと諦めずに探している時に、B児が①「じゃあ、ここにワナ仕掛けたらええやん。」と言った。②「ほんまやな！」「じゃあ、木の枝とかで逃げられへんようにしたらいいんちゃう？」「前見つけたとこの近くに作ろ！」など周りにいた子ども達も賛成し、話し合いながらワナづくりを始めた。

すると、C児が③「エサ置いとかなあかんのちゃう？カナヘビって何食べるんやろ？」とつぶやいた。周りにいた子ども達全員が集まり、④「草やろ？」「いや木の近くで見たから木ちゃう？」「木なんて食べへんで。」と言い合いになった。教師が「じゃあ、どうやって調べたらいいかな？」と投げ掛けると、「そうや！図鑑で調べたらいいんや！」と口々に言い始め、図鑑を出して調べ始めた。



そうや！図鑑で調べよ！



【考 察】

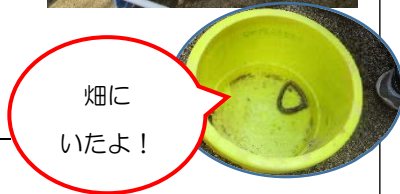
① 気付き・発見 ② 試行・探求・調査 ③ 疑問 ④ 試行・探求・調査

教師は最初に見付けた場所の近くでカナヘビを探し、捕まえられたらとしか想定していなかったもので、子ども達からワナを仕掛けようという柔軟な考えが出てきたことに驚いた。まだ一つの出来事についてどうしたらいいのかわからず教師や友達と一緒に考え、試してみようとする姿が見られるようになってきた。また、自分で図鑑で調べて分かった経験から、何か分からないことがあれば人に聞くだけでなく、図鑑などを使って自分で調べてみようとする姿も見られるようになってきた。



### 事例3 「カナヘビのエサ探し ミミズ編」 4月中旬

図鑑を見てみると、「昆虫を食べる、枯れ草が好き」と書いてあった。①C児が「虫ってことはミミズ食べるんちゃう？」と言った。教師が「じゃあ、ミミズってどこで捕まえられるのかな？」と問いかけると、②D児が「土の中におるって図鑑に書いてある！」と話し、小学校の校庭の砂場や木の下を掘ってみることにした。しかし、どこを掘ってもミミズはおらず悩んでいると、③E児が「あっ、じいちゃんの畑で見たことあるで。」と言った。「じゃあ、幼稚園の畑探してみる？」と教師が提案し、④みんなで幼稚園の畑の土の中を探してみることにした。すると、畑の中からミミズを見付けることができ、⑤I児が「ミミズさんは、畑の土が好きなんや。」と言っていた。



① 気付き・発見    ② 試行・探求・調査    ③ 伝達・共有    ④ 試行・反復    ⑤ 気付き・発見

#### 【考 察】

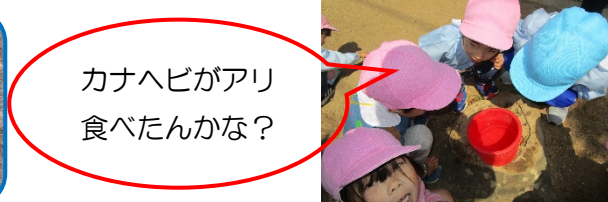
図鑑には土の中と載っているが、どこの土でも同じという訳ではなく、場所が違えば土の成分や性質も違い、その土の中に住んでいる生き物も違うということに子ども達は体感的に気付くことができていることが驚いた。特に予想を立てて失敗し、次はどうしたらいいか考えた時に、過去の自分の経験したことから新たな考えを導き出せる力があることがさすが5歳児だと感じた。考えて試したり、失敗したりした経験を学びへと繋げていきたいと思った。

### 事例4 「カナヘビのエサ探し アリ編①」 4月下旬



ある日カナヘビを探して下を見ながら歩いていると、アリの行列を見付けた。①B児が「もしかしたら、(カナヘビは)アリも食べるんちゃう？」と話し、②アリを捕まえて空き容器の中に入れることにした。そして「ワナに置いとこう!」とワナの場所にバケツで蓋をして置いておくことにした。また、③G児が「喉乾いたら飲むために水もいるんちゃう？」と容器に水を入れ、それも置いておくことにした。

次の日、ワナを見に行くと、カナヘビはいなかったが、アリもいなくなっていた。子どもたちは「カナヘビが食べたんや!」と大興奮!ちょうどアリの飼い方が載っている図鑑があり、アリに興味をもった子ども達は④「アリ飼ってみたい。」「そしたら、カナヘビのエサにもできるやん。」と瓶の中に土を入れ、アリを飼ってみることにした。



#### 【考 察】

① 疑問・発見    ② 試行・探求・調査    ③ 疑問・発見・試行    ④ 広がり・深まり

カナヘビを見付けるために、木の根っこや草むらなど地面に注目し、普段とは違った視点で見ることで、子どもたちは今まで気付かなかったアリという存在に出会えたのだと思う。カナヘビが虫を食べることが分かったと、子ども達の中で小虫を見付けると、「これはカナヘビ食べるんかな?」とカナヘビのエサとして捉えることが増えてきた。それだけ、カナヘビへの興味関心が高い証拠であり、この頃から、「カナヘビも喉乾くかもしれん。」とカナヘビの立場になって考える子どもも出てきた。また、アリを飼育してエサにしようという発想が出てきたことに驚いた。

## 事例5 「カナヘビのエサ探し アリ編②」 4月下旬

翌朝、登園して来た子どもがアリの様子を見に行くと、アリが全て死んでしまっていた。「なんで死んでしまったのかな？」と教師が尋ねると、①「ケンカして死んじゃったんちゃう？」「好きなエサがなかったのかな？」とそれぞれに考えていた。

その後校庭に行き、もう一度アリの様子を観察してみると、②A児が「分かった！色が違うからや。」と言った。みんなで地面をよく見てみると、③茶色と黒色のアリがいることに気が付いた。しかし④「でも、みんなお家一緒やから友達なんちゃう？」とまだ疑問に思っている子どももいたので、「じゃあ、茶色と黒色のアリについていって見たら？」と教師が提案した。子ども達は茶色と黒色のアリについていき、巣を探してみることにした。すると、⑤茶色のアリは木の根元に巣があり、黒色のアリは地面の近くに巣があることが分かった。「お家が違うんや。」「仲間じゃないアリもおるんや。」と驚き、納得する姿が見られた。

そして⑥今度は同じ巣のアリだけを集め飼ってみることにした。すると翌日以降も生きているアリが多かった。

アリの巣発見！



アリの色が違う！



① 疑問 ② 気付き・発見 ③ 気付き・発見 ④ 疑問 ⑤ 広がり・深まり ⑥ 試行・反復・探求・調査

### 【考 察】

アリが全部死んでしまったという事実からなぜ死んだのか子ども達自身で考え、それぞれに自分の意見を持つことができる子どもが増えてきたように思う。教師自身も、地面にいるアリの色が違うことや違う巣のアリ同士はけんかすることなど知らなかったのが、改めて子どもたちの発想や着眼点の豊かさに感心し、自分の勉強不足を反省した。

## 《カナヘビ探検隊～飼育編》

### 事例1 「あこがれのカナヘビさん」 5月下旬

ある日 A 児が家でカナヘビを捕まえ、幼稚園にもってきた。みんな憧れのカナヘビを目の前にして大興奮！飼育ケースの周りを取り囲み「目がかわいい。」「しっぽ長いな。」など特徴を観察しながら熱心にカナヘビの様子を眺めていた。「もっと詳しく見てみる？」と教師が観察ケースを用意すると、観察ケースを覗いて②F児が「カナヘビの心臓ドクドク動いてる」と言った。③ほかの子どもも「ほんまや！動いてる。」「生きてるってことやな。」と共感していた。

“カメックス”と名付け、クラスで飼ってみることにした。



心臓ドクドク動いてる



### 【考 察】

① 気付き・発見 ② 発見 ③ 伝達・共有

春から追い求めてきたカナヘビに出会い、子ども達は大喜びで、食い入るように見ていた。虫眼鏡や観察ケースでカナヘビを覗いた時に、肌の質感や目の大きさ、手の形など観察したが、子ども達の中で一番印象に残っていたのは、心臓がドクドクと波打っている姿だった。以前バッタやダンゴムシなどの虫は虫眼鏡で見たことがあったが、目で見て心臓が動いていると分かったのは初めてだったので、生きていることを実感し、印象に残ったのだと思う。また、自分達で名前を付けることで一層愛着がわいてきたのだと思う。



## 事例2 「ついに捕獲！カナヘビさん」 5月下旬

数日後、ついに校庭でカナヘビを捕まえることができた。子ども達は、①以前ワナを仕掛けていた近くで捕まえたので、「やっぱりな！ここに住んどったんや！」と自分達の見立ては間違っていなかったんだと確信し、自慢気に教師や年少児、保護者に伝える姿が見られた。

一匹目と同じ飼育ケースに入れてみると、子ども達が②「あれ？なんかこの子模様が違うで」「ほんまや、違う。」と模様や大きさが違うことに気が付いた。なぜ同じカナヘビで模様が違うのかクラスで話し合ってみた。

- ・メスとオスの違い
- ・大人と子どもの違い
- ・種類の違い

など意見が出た。

出てきた意見をもとに、図鑑で調べてみるが、詳しい情報は載っておらず、「困ったなあ。どうやって調べる？」と教師が尋ねると、③「お母さんのスマホで調べてみるわ！」と子ども達が言い、インターネットの情報も活用することにした。



カナヘビ  
捕まえた！！



模様が違う！



① 試行・探求・納得

② 気付き・疑問・共有・深まり

③ 探求・調査

### 【考 察】

最初にワナを仕掛けていた場所でカナヘビを捕まえることができ、子ども達は自分達の見立てが間違いではなかったと自信がつき、より主体的に生き物に関わるようになった。また生き物をよく見るようになり、小さな違いにも気付くことができるようになってきた。そして生き物について詳しく調べるためには、図鑑だけでは情報量が足りず、求めている答えにたどり着けなかったので、保護者に協力してもらいインターネットを用いて情報を得た。疑問に思ったことに対して予想を立て、自分の考えをもてるようになってきたので、この頃からクラスでの話し合いの場や発表の場を積極的に設けた。自分の考えを言葉で友達に伝えたり、友達の話を聞いたりできるようにしていきたいと思う。

## 事例3 「好きな食べ物何やろ」 6月中旬



カナヘビを捕まえてきた①A児が「カナヘビなんの虫食べるか分からへん。」と困っていた。以前図鑑で調べたので、カナヘビが食べる物は虫だと分かっているが、どんな虫でも食べるのか、何が好きなのか、分からなかった所以調べてみることにした。しかし、調べてみるが図鑑にもネットにもあまり詳しく書いていなかった所以、「一度カナヘビさんにあげてみたら？」と教師が誘い、②実際にカナヘビに様々な種類の虫を与えて食べる様子を見ることにした。

まず、アリやミミズ、ダンゴムシなどをカナヘビに与えてみるが、全く反応せず食べなかった。子ども達は「あれ？アリ全然食べへんな。好きじゃないんかな？」と不思議そうに見ていたが、③「じゃあ次は何あげてみよ？」とカナヘビの反応に興味津々だった。次にガをあげてみると、ピクッと顔を動かして反応したが、食べはしなかった。

ある日、体育館から帰ってくる時にクモを見つけた。④「このクモ、カナヘビにあげてみよ！」と持って帰ってカナヘビに与えてみると、目の前でパクッと食べた。「カナヘビがクモ食べた！」と子ども達は大喜びだった。

【考 察】

子ども達はカナヘビがエサを食べない現実と直面して、最初は困っていた。しかし、まずは何でも試してみたらよいことが分かったと、自分達で考え、試行錯誤しながらやってみようとする姿が見られるようになった。なかなか食べる虫が特定できなかった分、カナヘビがクモを目の前で食べたときの喜びは大きかったと思う。その後はカナヘビが食べてくれるのが嬉しくて、小虫を見付けては、カナヘビに与えようとする姿が見られた。

《カナヘビ探検隊～いのちのつながりへ》

事例1 「なんか顔が違う」 6月上旬

ある日、降園時に子ども達が「カナヘビや！」と側溝にいた“カナヘビ”を捕まえた。①しかし、よく見てみると、顔や手の形が違い、触った身体の感触が違う。「先生、これなんか顔が違う。」子ども達が不思議に思いながら触っていると、「あっ！しっぽ取れた！」との声がした。初めてしっぽが取れたところを見て、「しっぽまだ動いてる」「うわぁ、気持ち悪い」と驚く子ども達。その様子を見て、②A児が「これカナヘビじゃないんちゃう？違う種類ちゃう？」と言った。「じゃあ、明日みんなで調べてみよか。」と教師が提案すると、子ども達も同意して家に帰った。

次の日③A児が「先生、昨日のわかったで！」と家の図鑑をもってきてくれた。「あんな、これ“ヤモリ”っていうんやで」とみんなに図鑑を見せた。「ほんまや。図鑑と顔が一緒やな」④「でも、カナヘビと一緒にのページに書かれてるから仲間なんちゃう？」と発見があり、カナヘビと一緒に飼育ケースに入れて飼ってみることにした。

しかし、その日の夕方にヤモリが死んでしまった。

「なんでヤモリは死んでしまったのかな？」と教師が問い掛け⑤クラスで話し合うと、

- ・カナヘビにえさを横取りされた、けんかしたから
- ・しっぽが治らなかったから
- ・上に登って落ちて石で頭をぶつけたから
- ・裏を向いてもとに戻れなかったから

などの意見が出た。子ども達は、かわいがって飼育している生き物が死んでしまったことに

ショックを受け、悲しむ子が多かった。⑥B児が

「お墓作ろう」と言い、みんなで近くの植木の下に穴を掘って

埋めることにした。「お花取って来よう」「お見舞い(お参り)しよ」と他の子ども達も自然と手を合わせて、死を悲しむ姿が見られた。



【考 察】

子ども達は、カナヘビだと思って捕まえた小動物がヤモリという生き物だったことにとても驚いていた。教師は色や形がよく似ているのにも関わらず、手や体の形、特に顔の違いまで気付いていたことに驚いた。それだけカナヘビをよく観察し、愛情をもって世話をしているのだと実感した。また、ヤモリが死んでしまった理由を考えた時に、カナヘビは飼育ケースの壁には登れなかったがヤモリは登れたという事実をもとに、ヤモリは飼育ケースに登れるから落ちて死んでしまった、という推測を立てていることに驚いた。様々な体験から、理論立てて考えることができるようになってきていると思った。この頃からクラスの話し合いの中でも様々な視点から意見が出てくるようになってきた。そして、このヤモリの死から子ども達は生と死、命について少しずつ考えるようになっていった。



## 事例2 「クモ、カナヘビにあげる？逃がす？」

6月中旬

しばらくして家でカナヘビを捕まえてきた子どももあり、4匹のカナヘビをメスとオスに分けて飼うことになった。そしてその分エサがたくさん必要になっていた。

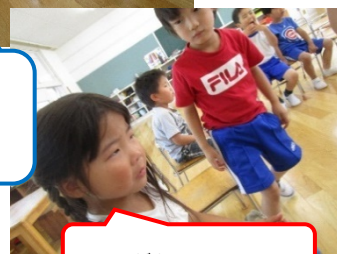
そんなある日、①C児が登園中にクモを見つけてみんなの前で「カナヘビのエサにするためにクモをもってきました。」と紹介した。すると②I児が「でも、クモさん食べたらかわいそう。」と言った。その一言をきっかけに③クモを逃がす派とカナヘビのエサにする派でクラスが真っ二つに割れ、大議論が始まった。

「もしかしたら、クモにもお母さんとかお父さんがおるかもしれない。」「子どもたちが帰って来おへんなって心配しとるかもやから逃がそう。食べたらかわいそう。」という意見が出ると、「でも、エサなくてカナヘビ死んだらどうするん？」「そんなんカナヘビもかわいそうやん。」という反対意見も出て議論が白熱し、なかなか結論が出なかった。

そこで、「じゃあ今日はクモをもってきたC児に決めてもらうことにする？」と教師が提案すると、子ども達も納得して受け入れた。C児は悩みながら、カナヘビのエサにすることを選択した。喜ぶ子どももいれば、結果に納得いかず泣き出す子どもの姿も見られた。



真剣に  
話し合い中



クモがかわいそう...

### 【考 察】

① 伝達・共有 ② 気づき・発見 ③ 伝達・共有・広がり・深まり

子ども達はC児の発言をきっかけに、今までカナヘビのエサだと軽く考えていたクモなどの小虫にも命があるという事実に気付いて、命の大切さについて考えるようになった。教師自身、ここまで議論が白熱するとは思っていなかったのが驚きが大きかった。子ども達はそれほど真剣にクモとカナヘビという二つの命と向き合い、考え、話し合ったのだと感じた。また、みんなが納得する結果を探すのが難しく、すぐに結論が出る問題でもなかったため、教師自身も迷ってしまった。しかし、結論が出なくてもみんなで命について考え、時間をかけて話し合う過程が子ども達にとって大きな学びになったのだと感じた。

## 事例3 「カマキリの赤ちゃんはどうしよう？」



逃したげよ！



数日後A児が戸外遊びの時にカマキリの赤ちゃんを見つけた。すると、①「発表タイムでカマキリの赤ちゃんをエサにするかみんなで決めたい。」と自分から言ってきたので、今度はカマキリの赤ちゃんをエサとしてカナヘビにあげるか、逃がすかみんなで話し合うことにした。

②最初は、「育てて、大きくなったら食べたら？」など新しい意見が出たり、前回と変わらず逃がす派とカナヘビのエサ派にほぼ同じメンバーで分かれたりしていたが、「カマキリまだ赤ちゃんやで。お母さんおるやろうからかわいそう。」「昨日もクモあげたやん。もうお腹いっぱいやで。」など逃がす派の意見を聞いているうちに、「やっぱりぼく逃がす方にする。」と意見が変わる子どもが出始めた。逃がす派は数では多くなったが、まだ納得がいない子どもがいたので、最終的に今回もカマキリを見つけたA児に決めてもらうことになった。A児はカナヘビを最初に捕まえ一番よく世話をしていたので、事例5のクモの話し合いでは、カナヘビのエサにしたいと強く主張していた。③悩んだ結果、A児は逃がすことを選択し、初めてエサとして捕まえた虫を逃がすことになった。そして、カナヘビのエサ派の子どももA児の意見を聞き、素直に受け入れ納得していた。

## 【考 察】

事例2の経験から一つ一つの命と向き合って、命の大切さを子ども達なりに考えた。今回は、最初は意見が分かれたが、友達の意見を聞いて自分の意見を変えることができる子どもが増えてきた。特に A 児に関しては、事例2の話し合いでは「カナヘビが死ぬのは絶対嫌や。」とカナヘビのエサにしようと強く主張して譲らなかったの、教師は今回もカナヘビのエサにしたいのだろうと思っており、逃がす選択をしたことに驚いた。カナヘビの飼育を通して様々な立場になって物事を考えられるようになり、思いやりの心が育っているのだと感じた。

## 事例4 「生きるために食べてるんやな」 7月中旬

生き物の絵本を見ていた①D児が「カナヘビって TENTUMシ 食べるんや！」と言うと、②A児が「でも、カナヘビって 固いもん 食べへんで。TENTUMシ は 食べへんのちゃう？」と言い、二人で一緒に絵本を読み進めることにした。すると、絵本の中でカナヘビが TENTUMシ を吐き出す場面があり、③「ほら、やっぱり、カナヘビは TENTUMシ 食べへんのや」「ほんまや」と A 児の意見に D 児も共感していた。

そして④A児が「他にもないか探してみよ」と言ったことをきっかけに、周りにいた子ども達が集まり、⑤みんなで生き物のシリーズの絵本を並べてみることにした。すると、⑥「見て！トカゲが カマキリ の赤ちゃん 食べてる！」「カマキリは ダングムシ 食べてるで」「バッタの赤ちゃんは クモ に 食べられてる」「でも、クモはカナヘビに 食べられるよな」とそれぞれに 食べたり、食べられたりすることに気が付いた子ども達。「みんな命を頂いて生きてるんやね。」と教師がつぶやくと、⑦「ほんまやな」「みんな生きるために食べてるんやな。」と子ども達も話していた。



みんな食べてるんやな…

① 気付き・発見

② 疑問

③ 気付き・発見

④ 試行・探求・調査

⑤ 調査

⑥ 気付き・発見・調査

⑦ 気付き・広がり・深まり

## 【考 察】

今までカナヘビを飼育して様々なことを試した経験から、絵本の内容をそのまま信じるのではなく、自分が体験してきたことを基に考え、疑問をもつことができるようになってきた。そして、その見立てが適切なものではなく、次第に的を得てきていることに驚いた。

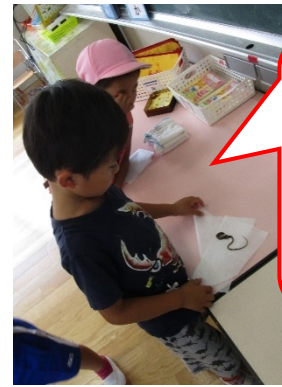
子ども達は絵本を並べて、絵本の中に出てくる生き物と生き物を比較してみることで、食べたり食べられたりする関係があるということに気付いたのだと思う。特にカナヘビに食べられてかわいそうだと思っていたクモがバッタの赤ちゃんを食べようとする場面に衝撃を受けていた。子ども達はこの事例を通して、生きるために食べる、生きるために別の命をいただいているということに気付くことができ、より学びを深めることが出来たのだと思う。



## 事例5 「ありがとう。カナヘビさん」

7月中旬

7月に入り、急に暑くなってくるとカナヘビが立て続けに2匹死んでしまった。最初は「寝てるだけちゃう？」と死んだことを認めたくない子どももいたが、①F児が「もう、心臓ドクドクしてないで」と言ったことでカナヘビが死んでしまったことに気づき、悲しんでいた。しかし、②エサを与えているのに食べずに死んでしまったことに疑問を覚えた子ども達。③みんなでなぜ死んでしまったのか話し合ってみると、「(エサが) クモじゃなかったからじゃない?」「でも、前はバッタも食べてたやん」「水が少なかったんかな〜?」「暑かったんかな」と様々な意見が出たが、④D児が「もう逃がしたげよ」と言った。不思議と反対意見が出ず、「うん」「逃がしたげよ」とみんなでカナヘビを逃がすことに決めた。逃がす時になると、少し寂しがっている子どもがいたので、「じゃあ、最後にカナヘビさんの絵描いてさよならする?」と教師が言うと、F児が「うん! そしたら、絵見てカナヘビさん思い出せるもんな」と言い、他の子ども達も同意してカナヘビの絵をかくことにした。



心臓ドクドクしてない。カナヘビ死んじゃったんや…

絵をかき始めると⑤「見て! みんなかいた!」と死んでしまったカナヘビも入れてかいたA児、カナヘビが好きなクモと一緒にかいたJ児、「舌を動かしてエサ食べてるところ」とカナヘビの特徴を捉えてかいたB児などそれぞれ愛に溢れた絵をかいていた。



A児の絵



J児の絵



B児の絵



そして、みんなで飼育ケースのふたを開けて花壇の下にカナヘビを逃がした。すると、偶然にも奥の方からトカゲが顔を出した。それを見て子ども達は「あっ! だんなさんや。迎えに来たんかな」「いや、このカナヘビはオスやからお嫁さんやん」「まだ帰って来へんなって(お母さんが)迎えに来たんちゃう?」と最後までカナヘビの物語を想像しながら笑顔で見送ることができた。



① 気づき・発見    ② 疑問    ③ 調査・探求・伝達・共有    ④ 納得    ⑤ 気づき・伝達・広がり

### 【考 察】

最初は大好きなカナヘビが死んでしまったことを認めたくない子どももいたが、F児の発言で最初にカナヘビを虫眼鏡で見た時はドクドク動いていた心臓が、動かなくなっていることに子ども達は死を実感していた。立て続けに飼っていたカナヘビが死んでしまったことを悲しみ、疑問を覚えた子ども達はD児の発言をきっかけに、このままでいいのか、逃がしてあげた方がいいのではないかと考え始めた。自分達はもっと飼って見たが、カナヘビにとってよいのはどちらだろうか、とカナヘビの立場に立って考えることができるようになっていた。みんなの心が一つになり、逃がすことに反対する子どもがいなかったのだと思う。また、最後にかいた絵は死んでしまったカナヘビも一緒にかいてあったり、いつもは少し絵が苦手な子どもも丁寧に色が塗ってあったりして、カナヘビに対して感謝や愛情の思いが強く感じられた。

## 事例1 「これってなんの幼虫？」 4月上旬

保護者からカブトムシの幼虫をたくさん譲っていただけることになり、一人一匹ずつ育ててみることにした。最初はカブトムシの幼虫を見たことがない子どもが多く、①「これってなんの幼虫？」と興味津々だった。教師もあえてカブトムシとは言わずに、「何になるのかな？」と答えた。②「ブニブニしてかわいい」と抵抗なく触れる子どもや「ちょっと怖い。気持ち悪い」と興味はあるのだが触るのには抵抗がある子どもなど反応は様々だった。



一人一匹なので、自分で幼虫に名前を付けた。「アオくん」「ピンクちゃん」など色や「らっきーちゃん」など自分の好きな言葉が多かった。③また、メス・オスの区別がまだついていないのだが、自分で「オスがいいな!」「メスがいい」と“ちゃん”や“くん”など名前に付けている子どもが多かった。

## 【考 察】

① 疑問 ② 気付き・発見 ③ 気付き・発見

カブトムシは見たことがあるが幼虫を見たことがない子どもが多かったので、敢えて答えを言わなかったことでより興味関心が高まり、育ててみたいという意欲に繋がれたのではないと思う。そして後日、自分達で図鑑を使って調べた時にカブトムシだと分かり、自分で調べた喜びや満足感に繋がることができてよかったと思う。また一人一匹カブトムシを飼えるという恵まれた環境もあり、子ども達は自分だけのカブトムシに心を惹かれ、愛着をもって大切に育てる姿勢が出たのだと感じた。名前付けも自分の子どものように悩んで、嬉しそうに付けていたのが印象的だった。そこで“ちゃん”か“くん”かなどからメスやオスの違いなどに興味が出てきたように思う。

## 事例2 「カブトムシってウンチするんや」 4月中旬～5月上旬



飼い始めてしばらくすると、飼育ケースの上の方に黒くて小さな土の塊のようなものが出てきた。①C児が「先生、この黒いの何？」と尋ねたので、新聞紙の上に土をひっくり返して見てみることにした。すると、土の中からも土の塊のようなものたくさん見つかった。②「もしかしてたまご？」など予測を立てていたが、カブトムシに詳しいE児からカブトムシのウンチだと教えてもらい、とても驚いていた。F児は「カブトムシもウンチするんやな」と初めて知ったようだ。

5月頃、いつものようにカブトムシのウンチを取って掃除をしていると、③H児が「先生、カブトムシが下痢してます」と心配そうに駆けてきた。カブトムシの幼虫を見ると、おしりから茶色い液体を出していた。④「なんかお腹痛そう」「えっ？病気なんかな？」とみんな心配になり、翌日に来園された人と自然の博物館の八木先生になぜ下痢をしたのか質問してみた。そして八木先生に「詳しいことは分からないが、おそらくサナギになる前に体の中の悪いものを出そうとしているのだろう」と教えていただき⑤「良かった。病気じゃないんや。でもカブトムシって下痢もするんやな」と安心したようだ

お腹痛い？





## 【考 察】

子ども達は世話をしている途中で現れた小さな土の塊が幼虫のウンチだということに驚いていた。特に幼虫がウンチををすると思っていた子どもが多かったので、目の前で幼虫がウンチをする様子を見て「ほんまにウンチするんやな」と実感していた。ウンチを手に乗せて触ったり、匂ってみたり、数を数えてみたりそれぞれが数や形にも興味をもって関わる姿が見られた。また自分たちでウンチの違いに気付き、なぜ違うのか考えることで想像力や考察力が育ってきていると感じた。

### 事例3 「ぼくのカブトムシは・・・？」 7月上旬

梅雨が明け、急に暑くなってきたある朝。幼稚園の廊下にオスのカブトムシが脱走していた。このカブトムシを教師が紹介すると、「僕のかも！」「私のちゃう？」と久しぶりに自分達のカブトムシを見てみることにした。

すると、「あっ！私のカブトムシになってる！」「ぼくもや！」とあちこちで喜びの声が聞かれたが、①B児が「僕のカブトムシおらん…」とつぶやいた。

見てみると、②B児の飼育ケースにはサナギの部屋はあるのだがサナギもカブトムシもいなかった。B児は「土に溶けちゃったのかな」と話していたが、土をひっくり返して探してみると、中からカブトムシになりかけて止まってしまったサナギが出てきた。「カブトムシにうまくなれへんかったのかな？」「なんでやるな」「せまかったんちゃう？」と周りにいた子ども達も不思議そうに見ていた。



## 【考 察】

① 気付き・発見    ② 気付き・発見・疑問・探求・調査・共有

ついに春から育てていた幼虫がカブトムシになったことを子ども達はとても喜んでいました。特に自分が名前を付けて育てたカブトムシということで喜びが倍増し、嬉しそうに保護者に見せて家にもって帰る子どもが多かった。その中で上手く羽化しきれなかったサナギもあり、B児は残念そうだった。子ども達にとってサナギから羽化できずに死んでしまう場合もあることを知るよい機会になったと思う。教師はサナギからカブトムシになる過程を子ども達に見せてあげたいと思っていたが、その方法が分からず羽化するまで何もできなかった。その後トイレットペーパーの芯を切って外から見る事ができるサナギの飼育方法を知り、いつか実践したいと思った。

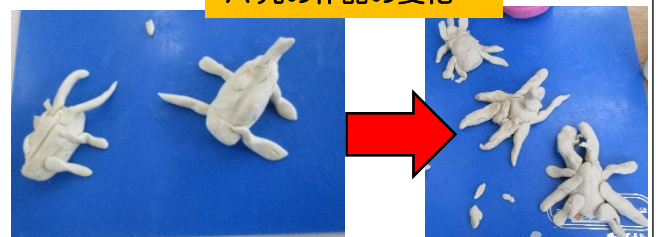
### 事例4 「カブトムシで遊ぼう」 7月中旬

カブトムシが孵り、大喜びの子ども達。登園後すぐにカブトムシを見たり、触ったりして遊んでいた。F児は自分のカブトムシを触りたいようだが、以前カブトムシに足で引っ掻かれた経験から怖くて触れないようだった。そこで「Eちゃん先生に教えてもらおう」と教師が提案し、①カブトムシに詳しいE児に触り方を教えてもらうことにした。オスは小さい角の方をもつとよいことを教えてもらおうと、F児はおそるおそる触りながらもつことができた。



A児を中心に粘土でカブトムシをつくって遊んでいた。角や体などカブトムシによく似ているが、足の本数だったり、角が変な所から生えていたり曖昧な点が多かった。後日、カブトムシをよく観察して自分だけの理想のカブトムシをつくる機会を設けた。すると②子ども達のつくるカブトムシも足が6本になり、目や角の小さいギザギザなど細かい部分まで再現できるようになっていた。

A児の作品の変化



## 【考 察】

① 伝達・共有・挑戦

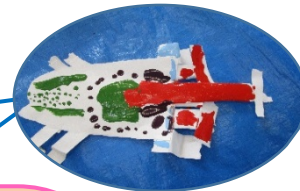
② 気付き・発見・伝達・広がり

子ども達は自分で育てたカブトムシに愛着をもって関わっていた。触るのを怖がっていた子どももカブトムシの触り方を教師から聞くのではなく、友達から教えてもらうことで自分もできるかもしれないと感じ、勇気を出して触れるようになったのだと思う。また先生となって教えた子どもにも自信がつき、自分から友達に声を掛けて教える姿が見られるようになった。粘土の変化では普段カブトムシと触れ合ったり、見たりするだけでは注目していない部分があるので、カブトムシの目や角の位置、足の数、体の裏側など観察する時間を設けた。意識することで子ども達はじっくり観察してカブトムシの特徴を捉え、粘土や絵で表現することができるようになった。

## すもう大会



## ゆめの カブトムシづくり



## 【その他の取り組み】

### うんちの謎



えさをたくさん  
あげてみた

カメはうんちを  
するのかな・・・？



うんちした！！



コオロギのうんち



色が2色！

カナヘビのうんち

### メス・オスの違い



チョウのサナギの「サク  
ラ」はちゃんつくん？



ミミズはオス・メス一緒なんだって

## 【感 想】

子ども達は昨年度からの取組もあり、虫や草花など生き物が好きで何事にも興味関心を示す子どもが多かった。そして4月に校庭で見た一匹のカナヘビから今年度の取組が始まった。教師自身カナヘビを飼うことになるとは思ってもいなかったが、子ども達は今まで見たことがない生き物に興味をもち、自ら物語を進めていった。

今年度の取組としては、試行錯誤や話し合いが課題に挙げられると思う。特に「カナヘビ」というあまり馴染みのない生き物を飼い始めたことで、飼い方や食べ物など子ども達の身近にある図鑑には詳しく載っておらず、インターネットの情報を活用したり、実際に自分たちで試してみたりして試行錯誤しながら子ども達は様々なことを学んでいった。

またカナヘビは生餌を食べることから、食べられる虫の立場になって考え、みんなでエサの虫をどうするか何度も話し合い、子ども達は命の大切さやつながりに気付くことができたのだと思う。これは全体のテーマである「ためしてみよう」につながっている。試した結果どうだったから次はこうしようなど、話し合ったり考えたりすることで次第に子ども達一人一人が自分の考えをもち、意欲をもって取り組めるようになってきた。

今年度の取組を通して子ども達が自分たちで「やってみたい」「ためしてみよう」という意欲が沸く環境づくりのためには、教師自身が様々なものに興味をもち、幅広い知識を得ることがとても大切だと改めて学んだ。そして、子ども達の気付きや取組の様子を保護者に発信していくことで、相互に学びを深めていけるのだと感じた。





## 事例1 「トマトの赤ちゃん？」 5月10日

園で一人一鉢の栽培をすることになり、夏野菜のミニトマトを育てることになった。祖父母の畑で栽培されているのを見たことがある子どももいたが、ミニトマトを苗から育てることを知らない子どもが多く、  
①「これがトマトになるん？」「これってトマトの赤ちゃんなん？」と教師に尋ねてきた。



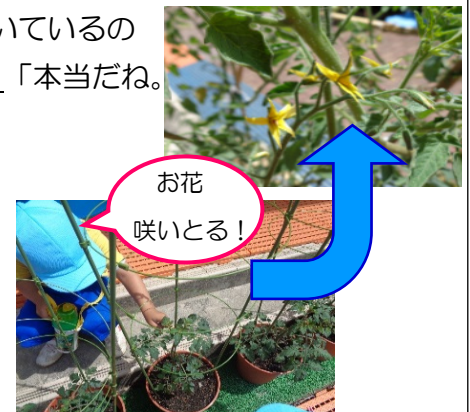
## ①疑問

## 【考 察】

ミニトマトを店で買ったり他の家庭からもらったりすることはあるが、育てることを初めて経験する子ども達の「これがトマトになるん？」と不思議そうに尋ねる姿に、教師はミニトマトの育っていく過程を子どもに伝えていきたいと感じた。ままごと遊びが好きな子どもが多いので「トマトの赤ちゃん」という言葉が出てきたのだろう。ミニトマトへの愛着の芽生えが伺えた。

## 事例2 「お花が咲いた！」 5月22日

毎日水やりをする中で、A児が自分のミニトマトの苗に黄色い花が咲いているのを見付け、①「先生、トマトに黄色いお花が咲いとる」と知らせに来た。「本当だね。トマトもお花が咲くんだね。すごい、発見だね。」と教師が答えると、  
②そのやりとりを見ていた他の子どもも自分のミニトマトにも花が咲いているか探しに行った。「僕のも咲いとった」「私のも」という声があちこちから挙がり、その日から水やりに加えて花探しも習慣になった。



## ①子どもの気付き・発見 ②探求・調査

## 【考 察】

今まではただ水やりを楽しんでいた子ども達だったが、ミニトマトの花を見付けてからは、ミニトマトを観察したり花を見付けて喜んだりするなど、ミニトマトの変化に興味をもって水やりをするようになり、気持ちの変化が見られた。

## 事例3 「緑色のミニトマト」 6月上旬

① B児が、ミニトマトの花がたくさん咲いている中に緑色の実がなっているのを発見して、近くのC児に知らせた。②「花の後に実ができるんやで」とC児がB児に伝え、③「そうなんや」とB児はじっと緑色のトマトを見つめていた。



【考 察】

B児は、自分の苗に緑の実がなっていることに気付いたが、突然実がなったと思っていたようだ。C児から、花の後に実がなるということを聞き、新たな気づきが増えた。C児もB児に伝え、「そうなんや」と共感してもらったことで満足感を感じることができた。

これをきっかけにトマトの色付きに興味をもち「トマトって、黄色とかオレンジとか黒とかもあるんやで」と話す子どももいた。その気づきを他児にも経験してもらいたいと思い、黄色（楕円形）とオレンジ色のミニトマトをプランターに植えてみた。

事例4 「小さい時には青い服、大きくなったら赤い服」 6月24日

緑色だったミニトマトがだんだん色付き始め、緑色からオレンジ色に変化していた。「トマトは赤やで」と言う子どもがいたのだが、実際の変化は緑色からオレンジ色である。①「不思議やな」という声が聞こえた。

ある日、教師がトマトの歌があることに気づき、クラスで紹介した。「小さい時には青い服、大きくなったら赤い服」という歌詞があり、②「今のトマトも、大きくなったら全部赤色になるんちゃう？」と考える子どもがいた。



トマト 作詞 荘司武 作曲 大中恩

1. トマトって かわいいなまえだね  
うえからよんでもトマト  
したからよんでもトマト
2. トマトって なかなかおしゃれだね  
ちいさいときには あおいふく  
おおきくなったら あかいふく

①疑問 ②探求

【考 察】

トマトは赤！と思っていた子どもが多かったが、実際の色の変化に驚き不思議だなという気持ちが大きくなった。ミニトマトがだんだんと色付いていくことに気付いたのは、実際に育てて毎日観察した結果の学びである。実際に経験すること、継続することの大切さを改めて感じている。

事例5 「ミニトマトもお散歩に行くからちゃう？」 7月1日

緑色からオレンジ色になっていたミニトマトが赤くなり、収穫の日を迎えた。クラスで育てていたオレンジと黄色のミニトマトも色付き、一緒に収穫した。収穫の際、ミニトマトをヘタと一緒に収穫したD児に、E児が①「トマトに帽子ついとるやん」と話した。クラスでその会話の様子を伝え、「何でミニトマトは帽子を被ってるんやろう？」と教師が尋ねると、「暑いからちゃう？」「トマトもお散歩に行くからちゃう？」という意見が出た。教師が「お散歩ってどんな風にするんやろ？」と聞くと、「転がって行くんやん」という答えが返ってきたので、教師は画板を用意して坂道に見立て、②オレンジや黄色のトマト、色付く前の緑色のトマトも一緒に転がしてみることにした。

すると、ミニトマトの散歩から③「どれが早いかな？」と友達と予想し、競争へと発展していった。4色のミニトマトを同時に転がすと、何回やっても赤、オレンジ、黄色、緑の順になった。



収穫！



真っ赤なトマト  
いっぱい採れたよ！

お散歩に行くから  
ちゃう？

なんですか？



よーい、どん！



子どもの気付き・発見 ②試行 ③試行・反復・調査

### 【考 察】

ミニトマトのヘタを帽子、散歩に行くから帽子を被っているという発想に教師は感心した。帽子という発想は、普段自分達が外へ出る時に帽子を被るということからきているのではないかと推測する。子どもの発想に共感し、転がすという環境を準備したことで、子ども自身が何度も試す姿が見られ、どれが早いのかという競争遊びへと発展していった。

### 事例6 「ミニトマトもプールに入るのかな？」 7月10日

園でプール遊びが始まってしばらく経ったある日、水やりや収穫をしていたF児が「トマトも僕たちみたいにプールに入るのかな？」とつぶやいた。「みんなと同じプールには入れないけど、お部屋でトマトをプールに入れてあげる？」と教師が提案すると、①「やりたい！」と返事が返ってきた。そこで教師は透明の容器に水を入れ、ミニトマト用のプールをつくった。②赤、オレンジ、黄色、緑のトマトを水に入れてみると、赤とオレンジは沈み、黄色と緑は浮かんた。

すると、子ども達の中で③「何で赤とオレンジは沈んで、黄色と緑は浮かぶのかな？」という疑問が生まれた。全員で話し合ってみると、④「軽いから沈んで、重いから浮かぶんや」という意見で一致した。

どうなるかな？



うわぁ！浮かんた！！



①挑戦 ②試行・調査 ③疑問 ④伝達・共有・納得

### 【考 察】

教師は、子ども達が軽い→浮かぶ・重い→沈むの関係性に気付いていないのではないかと推測し、水を入れたペットボトルとカラーボールを用意した。そして、どちらが重いかを一人ずつに持たせて確認すると、どの子もペットボトルの方が重いと答えた。次に、ペットボトルとカラーボールをミニトマト用のプールに入れた。結果は、ペットボトルは沈み、カラーボールは浮かんた。このことにより、子ども達は重いものは沈み、軽いものは浮かぶ、ということに気が付くことができた。



どっちが重いかな？



こっち！！

### 事例 7 「何で沈むんやろ？」 7月10日

軽い→浮かぶ・→重い→沈むの関係に気付いた子ども達。同じミニトマトなのに、種類が違うとなぜ浮かぶものや沈むものがあるのかという疑問が生まれ、②「今度はミニトマトを切って中身を見てみよう」というG児の話を受け、教師がミニトマトを半分に切ってみた。中にはジュレのようなものと種が入っており、③「種の数が違うから浮かぶのと沈むのがあるんちゃう？」という意見が出た。

④種を数えてみると、沈んだトマトの方が浮かんたトマトよりも種の量が少し多かった。⑤「やっぱりな」と子ども達も得意気だった。



赤のトマトの方が種が多い！

だから沈んだんや！  
やっぱりな！



①疑問 ②試行・調査・広がり ③気付き ④調査 ⑤納得

### 【考 察】

ミニトマトへの興味がさらに深まったことにより、「なぜ浮かぶ？なぜ沈む？」「トマトを切って中を見てみよう」という気持ちが生まれたのではないかと思います。転がす、水に入れるの事例の時よりも様々な意見が出ていたが、そこから疑問の解決に向けては教師の援助を必要としていたと感じた。

### 事例 8 「トマトが凍った！」 7月17日

子ども達が、ミニトマトを転がしたり、浮かんだり沈んだりする不思議さを楽しんでいく中で、教師自身が凍ったミニトマトがどうなるのかを試してみたいという気持ちが芽生えた。そこでミニトマトを凍らせてみた。子ども達は凍ったミニトマトに興味していたが、①「お水に入れてみよう」とE児がすぐに水に入れ、どうなるのかを観察していた。今回も、赤、オレンジ、黄色、緑のトマトを1つずつ入れると凍ったトマトは4つとも浮かんた。子ども達は、「やった！」と大喜びしていたのだが、②時間が経つとトマトは4つとも沈んでいった。「何で凍ったトマトは浮かんたのかな？」と教師が問いかけると、③「トマトの中身が凍るとるからや」という答えが返ってきた。





① 試行・調査・広がり ②調査 ③試行・調査・広がり

#### 【考 察】

教師が意図的にミニトマトを凍らせ、四つとも浮かぶというまさかの展開になり、不思議だな、面白いなという子どもの気持ちの深まりを感じることができた。教師も疑問に思ったことを実際に試してみることで、子ども達と一緒に新たな発見をすることができた。

### 事例 9 「どれが一番長く浮くかな？」 7月18日

凍ったトマトを浮かばせた後、①「前みたいに四つ一緒に入れてみよう」というE児の提案をきっかけに、②どれが長く浮かんでいられるかをみんなで予想してみようということになった。赤が63秒で沈み、その後、オレンジ78秒、緑186秒、黄色200秒という順で沈んでいった。



①試行・広がり・深まり ②試行・探求・調査

#### 【考 察】

幼児の中で、やはり競争にしたいという思いが強く、どれが長く浮くか競争になった。数を数えるのは、教師と子ども達で一緒に「いち、に」と数えていった。一緒に数えることでミニトマトが沈むごとに残念がったり喜んだりする姿が見られ、200秒という長い間、最後まで観察することができ、子ども達のミニトマトへの興味関心の広がりを感じることができた。

#### 【感 想】

ミニトマトを一人一鉢育てることで、「自分のもの」という愛着が湧き、トマトが苦手な子も生長を楽しみにしながら育てることができた。また興味をもって育てることで、花が咲いたこと、小さな実ができて大きくなること、少しずつ色が変わることなどの小さな変化にも気付くことができた。収穫の際の「トマトが帽子を被っているのはお散歩に行くからじゃない?」「トマトもプールにはいるのかな?」という子どもの感性に教師は驚いた。その思いを受け止め共感していくことにより、ミニトマト一つでいろいろな遊びや興味の深まりに発展した。教師の援助の大切さを改めて感じる事ができた。

軽い・重い、浮かぶ・沈むの事例では、その関係性を4歳児にどうしたらうまく伝えられるか悩み、教材研究の大切さを実感した。

子ども達の「不思議だな」「なんでだろう?」という気持ちに教師が寄り添い、環境を整えることで疑問が解決したり興味が深まったりする。今回の浮かぶ・沈むの事例後、家庭でもいろいろな野菜を水に浮かべた、という子どもがおり、興味の深まりを感じた。

今後も日々の遊びや経験、体験の中で生まれた、子ども達の「なんでだろう?」に寄り添い、援助をしながら保育を進め、「なんでだろう?」から「ためしてみよう」の土台づくりをしていきたい。

## 事例1 「わ！気持ち悪い～」 6月上旬

(保護者の思い、変化 教師の援助)

プランターのピオウに黒い幼虫がいるのを降園時に子どもが見付けた。嬉しそうに子どもたちは覗き込んでいるが、ほとんどの保護者は「え～毛虫？」「触って大丈夫なんですか？」と一歩引いて見ている。子ども達が「見て！」と幼虫を手に乗せて見せに行っても「きゃあ！」「もって来んといて！」と顔を反らしたり、逃げたりする保護者がいた。子ども達には「何になるのかな？」と期待をもたせていたが、保護者には「ツマグロヒョウモンというチョウの幼虫で毒はないですよ」と伝えた。教師の説明で納得した保護者もいたが、まだ不安そうな表情をしていたり、幼虫に関心が薄い保護者もいた。



## 【考 察】

見た目がグロテスクなツマグロヒョウモンの幼虫は子どもには受け入れやすいが、保護者にはなかなか受け入れられにくいようだ。大人の世界では馴染みの薄い幼虫である為、必要以上に恐がったり、反対に興味淡薄かったりする保護者が多かった。子どもの興味に寄り添ってほしいと願い、掲示の方法を工夫することにした。

図鑑をコピー



幼虫の名前を明示

## 事例2 「え？これって触れるん？」 6月上旬

小学校の空き教室を仮園舎にしている為、放課後クラブを利用する小学生やその保護者も園の玄関前を行き来する。掲示をし始めてから「なにがおるん？」「触ってもええん？」と興味津々に覗き込む小学生が増えた。

「優しく触ってね」と声を掛けるととても楽しそうに幼虫を触ったり、その後の変化を楽しみにしたりする姿が見られた。小学生の話を聞き、放課後クラブの迎えの時にわざわざ立ち寄って「これがその幼虫なんですね」と興味を示す小学生の保護者もでてきた。

その姿を園の保護者が見たり、お便りや HP で知らせたりすることで興味淡薄かった保護者も関心を示すようになってきた。



幼虫を手に乗せる小学生



小学生が家族に説明をしている場面

## 【考 察】

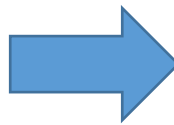
掲示を分かりやすくしたことで小学生にも興味をもてたようだ。放課後クラブへの移動の時間と降園時間が重なる曜日があり、幼虫との触れ合いを楽しんでいる小学生を園の保護者が目にする事で、将来の子どもの姿を想像したり、徐々に幼虫の特徴や食性、変態の様子などに興味を示したりするようになった。子どもが「見て！」と保護者の目の前に幼虫をもっていっても仰け反ったり、逃げだしたりする保護者はいなくなり「ほんとやね」「へえオレンジの模様があるんや」と子どものつぶやきに耳を傾ける姿が見られるようになった。



さなぎの場所  
を分かりやすく表示



経過を知らせ  
る掲示



羽化したツマグロ  
ヒョウモン



拡大写真と  
実物を掲示

### 事例3 「ドクロの種」 5月上旬～6月下旬

保護者が園の玄関に飾ってある寄せ植えの植木鉢の傍で、「先生、これって金魚草ですね。こんな種ってできるんですか？」と携帯端末の画面を見せながら尋ねてきた。見るとドクロそっくりの種袋が写っている。教師も知らなかったので今まで花が終わると抜いていた金魚草だが、**生長を最後まで見守ることにした**。すると本当にドクロのような種袋が出来、**それを掲示する**と子どもも**保護者も驚きの表情で見入っていた**。

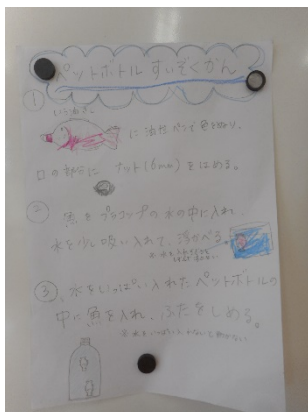


#### 【考 察】

保護者からの情報で新たな発見ができた。4月から継続的に園の取組を発信していったことで保護者の気付きも増えたようだ。情報提供してくれた保護者も、実際に体験できたことで子ども同様の喜びと感動を味わうことができ、より身近な動植物への関心が高まった。

#### 【感 想】

今年度は子どもたちの活動の様子をHPやドキュメントで積極的に情報発信し、チョウやガの蛹化や羽化の様子は出来るだけ実物を展示してきた。それがきっかけになり、家庭で子どもとも会話が増えたことがアンケートにも表れていた。クラスで子ども達が自分で見付けたり、気付いたりしたことを発表する場を設けることで、保護者も登降園時に花や昆虫を子どもと一緒に探したり、幼虫を見付けて「これって何ですかね」と教師に尋ねたりする姿が増えてきた。保護者も自分から発信したことが子ども達の興味につながることで、園の保育への参加意識が高まり、取組への理解や協力がより深まったと思われる。子ども達が図鑑で分からないことを家庭で調べてきてくれたり、教師が初めて体験するバケツ稲の育て方を祖父に聞いて教えてくれたり、と様々なバックアップを得ることができた。園内研修や外部講師からの学びも大切だが、保護者がもつ知恵と工夫の力の大きさを改めて感じた。

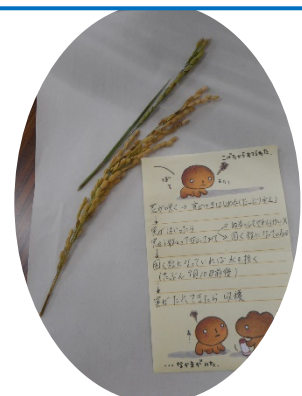


保護者作ってくれたペット  
ボトルの玩具の作り方



展示物を子どもと一緒に  
見ている姿

バケツ稲の収穫のタイミ  
ングを実物付きで持参



## 4 まとめ

今年は記録の中で子どもの心の動きを分析し、子どもの何が育まれ、教師の援助がどう反映されていくのかを読み取っていった。エピソードを振り返ることで教師の援助が適切でなかったり、もっと違うやり方があったりすることが分かり、確実に教師の資質向上につながっていった。

5 歳児の取組で生餌の是非をクラスで話し合う前に、教師間ではそういう場面が起こった時対応をどうするか、既に課題に挙がっていた。様々な事例や過去の経験を話し合った中で、決して教師自身の価値観を子どもに押し付けず、子どもたちの結論に任せようということになった。実際にその場面が起きたことで教師の迷いがでたが、子どもたち自身が納得するまで話し合えたことは、子どもにも教師にも貴重な体験になった。

命がつながっていくという、食物連鎖まで子どもたちが体感できたことは大きな収穫だろう。ある保護者から「今まで虫や生き物を捕まえると乱暴に扱って死なせてしまうことが多かったのですが、園でいろいろな飼育に取り組んでくださっているお陰で生き物を見付けても『飼ってみたい』『育ててみたい』という言葉が子どもから聞かれるようになりました。」という話を聞かせてもらった。子どもたちの中に生き物や昆虫は単なる「もの」ではなく「命ある友達」という意識が芽生えていることに研究の成果を感じた。

また、4 歳児の取組では一つの研究対象物をどう保育に取り入れていくか探っていくことで、子どものつづきやきや気付きから教師が予想してなかった遊びが生まれた。教師が子どもと共に「ためしてみたい」という意欲が高まり、その姿勢が研究の深まりに影響していったと感じる。

論文に載せきれなかった膨大なエピソードの一つ一つが子ども達の「科学する心」が育まれた足跡であり、培われつつある「学びに向かう力」の蓄積である。「知っている」ことを増やすのではなく「分かる」ことや「出来ること」を大切に、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする能力をこれからも育んでいきたいと思う。



チョウの蜜吸い体験

## 5 課題と今後の方向性

昨年度の課題で挙がっていた小学校教育への接続と成果を検証する取組を計画していたが、職員がほぼ入れ替わる人事異動が4月にあり、積み重ねが十分にできなかったことを反省する。

しかし、小学校との連絡会で幼稚園の教育が小学校でしっかり根付いている報告を受け、今までの取組は成果があったと実感できた。来年度からはこども園に移行し小学校校舎での生活は終了するが、今まで培ってきた教師間の交流や児童や卒園児との触れ合いは継続していきたいと考えている。

また、子どもたちの主体的に学ぶ力を継続していくには園の取組だけでは不十分であることを感じた。より多くの情報や環境を整えるのに保護者の協力は欠かせない。保護者の姿勢が子ども達の意欲や人間性の育ちが生涯にわたり影響を及ぼすことは言うまでもない。保護者の理解と協力を得て「不思議っておもしろい」と感じ、「なんでだろう」と疑問をもち、「ためしてみよう」という意欲を継続できるよう幼児教育を担う施設としてできることは何か、これからも探っていききたいと思う。



羽化したカブトムシ  
に興味を示す家族

小学校からいただ  
いた梅



2種類の砂糖で梅  
ジュースに挑戦



|       |              |
|-------|--------------|
| 研究代表者 | 石川 美保        |
| 研究者   | 藤原 万貴子 廣峰 絵美 |